

# 十三の畫の廊

## 〈花黙の宿〉

現代において茶室は「もてなしの場」という役割が薄れている。故に過ごしやすさの尺度は居住者自身にある。

襖絵は座位での鑑賞を想定して描かれるという。一方で私たちは居室でどのように過ごしているのか。臥位、座位、立位といった様々な姿勢であるものの、周りには建築環境とわずかな眺望から考えられた窓と壁面のみである。



開

中柱

この手法では茶室にみられる中柱の曲がり木と点在する複数種の窓を一面に凝縮した。これにより季節と時間の変化を起因として移り行く風景変化を一本の木に起こる事象としてとらえることが可能になる。元来自然的な花木のサイクルに障子の開け閉め等の人為的要素を加える。部屋の過ごし方に合わせ景色を切り取る。居室が内包する物語性に際限などないのである。

図（上・左）  
季節：秋  
姿勢（視線高さ）：1m

可動部（障子）  
右上・左中央：上下方向  
中央上・中央下：左右方向

閉



春

\* 毎年のように異なる花の付き方に合わせて開口部分を変化。

\* 姿勢を変えてのお花見も楽しめる。



夏

\* 障子の開け閉めで通風・採光を調整。

\* 閉め切っていてもすべての高さからの眺望がある。



夜

\* 月の光と外に置かれたランプによって障子の影が室内に映る。

\* 障子紙が淡く光を通し光量の調整を可能にしている。

